

くりはらツーリズムネットワーク 設立総会

記 録 集



平成22年3月



Kurihara
Tourism
Network

くりはらツーリズムネットワーク

目 次

1 設立総会の概要	P 2
2 設立総会の記録	P 3
挨拶	P 3
祝 辞	P 4
来 賓	P 5
祝 電	P 5
経過報告（設立趣旨書）	P 6
議長選出	P 8
議事録署名人の指名並びに書記の指名	P 8
議 事	P 8
閉 会	P 10
ティータイム	P 10
3 設立総会議事録	P 11
4 記念講演	P 12
5 規 約	P 27
6 組織イメージ図	P 31
7 設立発起人の会	P 31

1 設立総会の概要

- 1 日 時 平成22年3月21日（日）午後1時30分～4時
- 2 場 所 栗原市市民活動支援センター多目的室
- 3 参加者 63人（会員45人、来賓5人、傍聴5人、事務局8人）

4 日 程

○会場準備／昼食会 [11:00～13:00]

○受付 [13:00～13:30]

○設立総会 [13:30～14:30]

- 1 開 会
- 2 挨拶
- 3 祝 辞
- 4 来賓紹介
- 5 経過報告
- 6 議長選出
- 7 議事録署名人の指名並びに書記の指名
- 8 議 事
 - 第1号議案 規約の制定について
 - 第2号議案 役員の選任について
 - 第3号議案 平成22年度事業計画（案）について
 - 第4号議案 平成22年度収支予算（案）について
- 9 その他
- 10 閉 会

○ティータイム [14:30～14:45]

○記念講演「どうぞ、お構いなく／あるがままの田舎の魅力」

※記念講演は、栗原市[くりはら研究所（産業経済部田園観光課）]と共催で実施（くりはら観光塾）。講師謝礼は栗原市が負担。

[14:45～16:00]

2 設立総会の記録

挨拶

くりはらツーリズムネットワーク設立発起人の会
会長 小野寺 敬



本日はお彼岸中が一番お忙しい中、また風が大変強い中、多数お集まりいただきまして、私たち発起人の会といたしましては、本当に厚く感謝を申し上げます。

本日は石田馨さんの記念講演を予定しております。素晴らしい記念講演になりますように期待しております。私も同じ「けい」という名前ですので、親しみをもちまして、誠に光栄に感じております。よろしくお願いいたします。

私ども、グリーン・ツーリズム実践者は、旧町村単位で、または個人的に、団体として、いろいろ形で活動してまいりましたが、なかなか新市政が施行後、栗原市として全体が一つに集まっているいろいろな話ができる機会があるのかなと皆さん希望をもっていました、これまで機会を得ず、今回の運びになった訳であります。

「平成20年岩手・宮城内陸地震」の復興を願って、「みやぎグリーン・ツーリズム推進協議会」から、「みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会」の開催はいかがですかと話がありまして、これを機に実行委員会を結成しました。初めて顔を合わす人もたくさんおりまして、実行委員で足並みを揃えるのが精一杯でしたが、短期間で大会を開催いたしました。

大会を開催してみて、栗原市は広すぎてなかなかまとまりきれないというよりは、私たちは広いだけにいろいろな方々がいるのではないかと、企画ができるのではないかと、メリットを生かした栗原市全体を一つにしたグリーン・ツーリズムのネットワーク協議会みたいなものを作り上げていきたいということになり、またそれができる広さがあるというように思って、現在に至った訳であります。

私どもが持っている、栗原市が持っている地域資源を再認識するとともに、その資源を使って、栗原市の人々に再認識していただいて、その活動を通して地域の活性化をはかしていきたい。またそれを通して、栗原市以外のところにアピールして、その価値を評価していただくという、いろいろな形を通して社会貢献をしていきたい、そんな目的をもってこの会を進めていきたいと存じております。

本日提案の議案を慎重審議していただきまして、すべて承認していただきますようお願いを申し上げます。

祝 辞

みやぎグリーン・ツーリズム推進協議会
会長 佐々木 重信 様



皆さんこんにちは。大崎市田尻で「農家レストラン蔵楽」という店をやっている佐々木と申します。専業農家でございまして、店は完全予約制にして、私もグリーン・ツーリズムを楽しんでおります。

昨年の12月には、栗原におきまして「みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会」を開催していただきまして、本当にありがとうございました。大勢の皆さんに協力をいただきながら、栗原の様々なところを見せていただき、県内各地の会員は非常に大会を堪能していたようでございます。県内にはグリーン・ツーリズムを積極的に推進している市町村があります。私どもは、それをつないで、グリーン・ツーリズムの質を向上させていこうという目的で活動しております。

グリーン・ツーリズムというのは、横文字なので「なんだ、そいず？」と言われることがあるのですが、難しく考えないで、もっと単純に考えて良いと思います。農村ばかりではありませんが、少子化になって高齢者も多くなって、若い人がどんどんいなくなって。私は五十代ですが、自分の地域では私が「若い人」になってしまい、それ位「若い人」がいなくなっている。そういうことを現実的に考えた場合、今住んでいる者が楽しく地域を盛り上げていかないと、なおさら若い人は地域に住み着かない、若い人がそこにやってこないということであります。自分達が何ももってなくても、人々を迎える温かい心があれば、多くの人々がそこに訪れてくれると思っています。多くの人々の農村での交流があって、地域は輝いて、若い人にはそれが羨ましく見えるときがきっと来ると私は思っております。

そういう意味でグリーン・ツーリズムでは、多くの人を農村に呼び農家に泊まって農作業をお手伝いするなり、あるいは子ども達を呼んで食育をするなり、農村でしかできない様々な活動があると思います。

今日この設立総会には、栗原市長がお越しでございます。県内各地で総会をやっていますが、首長が直々に来るというのは意外に珍しいことです。その位、市長さんも力を入れようという覚悟であると思っております。今、加美町や南三陸町では、グリーン・ツーリズムを積極的にやって、小学校から中学校、高校など都会の子どもたちを呼び込んでいます。積極的に交流しているところは、行政がすごいテコ入れをしています。行政が営業マンになり「私たちのところは素晴らしいところだから、いろいろな体験をしてくれ」と活動しております。幸い栗原市には、「田園観光課」というのがあります。恐らく日本中を探しても、「田園観光課」なる課をもっているところは少ないかと思っております。

地震で、麦屋弥生さんが亡くなりましたが、麦屋さんは非常に栗原を気に入っていたと新聞等を書いてありました。私も一回お話したことがあります。麦屋さんの想いをくみながら、今後、自分の地域のために、若い世代がこの地域に住んで、また新しい人がこの地域に来るように、活動を展開していただければ、栗原がもっと良くなるのではと私は考えております。

とりとめのない話をしてしまいましたが、今後の皆さまの活動を祈願し、簡単ではございますが祝辞とさせていただきます。

祝 辞

栗原市長 佐藤 勇 様

今日は、「くりはらツーリズムネットワーク」の設立総会にお招きいただきました。心からを今日の日をお祝い申し上げます。

先日、震災から間もなく2年、1年9カ月が終わろうとしているときに、地震を担当された陸上自衛隊東北方面隊第6師団の2万人を超える将兵の皆さんが栗原を訪ねてくれました。異動が激しく、次から次へと人が変わっていくなかで、副師団長だけが未だに現役でお出でいただきました。その方が異動してしまうと、栗原を知っているトップの方々がほとんどいなくなってしまう。そこで、さらに私の日程をとりまして、第6戦車隊隊長さんや機械隊隊長さん、偵察隊長さん方においでいただいた。地震のときは常日頃、隊長さん方が栗原に来ておられたのですが、代が変わると人の顔がわからなくなるだろう、栗原とのつながりを大切にしたいという思いで、皆さんがこの栗原を訪ねてこられた。そのような気持ちになるのは、接した住民の皆さま方にある温かい心、もてなしの心を自衛隊の方々が分かっているからだと思います。それが、私が普段から申している「もてなしの心」につながるのかなと。国土交通省や林野庁など遠くからいろいろな方々が栗原に来て、総合支所の2階を借りたり、アパートに住んだりしていた。この方々と心と心が通じている。これは、皆さま方の成果だと私は思っております。



小さな成果で、麦屋弥生さんを始めとするいろんな方が栗原に来られて「本当に栗原の良さを伝えられるのは住んでいるあなた方ですよ、それをどうして育てないのですか」と話されました。それが、このような立派な形でツーリズムが実践され、昔の街道や長屋門などの資源に注目したり、150年前の料理を再現したりですね、皆が楽しんでおられる。そしてそれが輝き始めている。ここまできたことを大変嬉しく思います。そしてこのような勉強する場もできております。どうかこの会を利用して、皆さんが益々ご発展されますよう、行政としてできることは何でもお手伝いさせていただくと、そういうふうなことで祝辞に代えさせていただきます。

発展を心からお祈り申し上げます。終わります。

来 賓

みやぎグリーン・ツーリズム推進協議会会長	佐々木重信 様
栗原市長	佐藤 勇 様
栗原市議会議長	小岩 孝一 様
宮城県議会議員	熊谷 義彦 様
宮城県北部地方振興事務所農村振興部次長	伊藤 紳 様

祝 電

宮城県議会議員 長谷川 敦 様

経過報告

事務局（栗原市産業経済部農林振興課主幹兼農政係長） 伊藤 仁志

これまで、それぞれの地域で農業体験や農家民宿、農家レストランなど、様々な活動の実践がなされてきました。しかしながら、これらの実践者のネットワークを構築する機会がありませんでした。

こうした状況下、昨年12月にみやぎグリーン・ツーリズム推進協議会主催の「第4回みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会」を栗原市で開催し、その中で、栗原市内のネットワークの構築が参加者の皆さん、実行委員の皆さんから声があがりました。

このような経過を踏まえて、「くりはらツーリズムネットワーク」の設立という経過になっております。この会は、グリーン・ツーリズムはもちろんのこと、農林漁業のみならず商工業もあわせて、栗原の自然、文化など地域資源を活用した複合的なツーリズムを推進していくということで、「くりはらツーリズムネットワーク」という名称にしております。

〔第4回みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会の開催〕

「第4回みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会（主催：みやぎグリーン・ツーリズム推進協議会）」を栗原市で開催することになり、大会実行委員会を組織。

【目的】

これまで集まることが無かった、栗原市内のグリーン・ツーリズム実践者が集まるきっかけとして 互いの顔や活動を知ることから
他地域の実践者から学べる機会

【経過】

2009年 8月25日	準備会
2009年 9月25日	第1回実行委員会
2009年10月 1日	第2回実行委員会
2009年10月 5日	役員会
2009年10月13日	第3回実行委員会
2009年10月26日	役員会
2009年10月28日	第4回実行委員会
2009年11月18日	役員会
2009年11月24日	第5回実行委員会
2009年12月 1日	第6回実行委員会
2009年12月3日・4日	第4回みやぎグリーン・ツーリズムネットワーク栗原大会
2009年12月25日	役員会
2010年 1月28日	第7回実行委員会

〔設立発起人会の設立〕

実行委員会で、大会を通じて、栗原市内の実践者をつなぐ組織の形成の機運が高まる。大会2日目の「第三部こたつ de フォーラム」の「こたつ de トーク」で、小野寺敬大会実行委員長が会場内の人々に組織形成の呼びかけをしたところ賛同を得る。

【経過】

2010年 1月28日	発起人の会設立、第1回打ち合わせ会 ・設設計画書（趣旨、事業、予算、組織、スケジュール等）
2010年 3月 4日	第2回打ち合わせ会 ・設立総会、記念講演の企画 ・規約 ・会員の勧誘
2010年 3月21日	くりはらツーリズムネットワーク設立総会

設立趣旨書

1 趣 旨

私たちが暮らす栗原市には、栗駒山や伊豆沼・内沼を始めとする豊かな自然の恩恵を受け、暮らしの糧となった農林漁業と商工業の積み重ねから育んできた地域の文化、風土があります。

これらは、地域のもつ資源であり、その資源を複合的に組み合わせて、グリーン・ツーリズムを始めとする多種多様なツーリズムの概念に学びながら、「くりはらツーリズム」として表現することが、地域の価値の再認識や栗原市に暮らすことの誇りや意欲の醸成につながり、さらには、地域経済の活性化に寄与できるのではないかと考えます。

その実現のためには、ツーリズム等の実践者が交流する場を形成することが必要ではないでしょうか。まずは、実践者が互いの活動を知り、その価値観を共有することで連携するきっかけができます。さらには、実践者のみならず、ツーリズムに興味のある人々が学ぶ機会を創出できます。

このことから、栗原市内の実践者が互いの価値観や活動に共感しながら交流し、よりよい関係を築き、協働することで、地域の価値を普遍化し、市民が精神的・文化的・経済的に充足した暮らしを営んでいくことを目的に、「くりはらツーリズムネットワーク」の設立を發起します。

2 理 念

- 一、私たちは、互いの価値観や活動に共感しながら交流し、
よりよい関係を築きます。
- 一、私たちは、活動を通じて、栗原市内外の人々に、
地域の価値を伝えます。
- 一、地域資源を複合的に組み合わせたツーリズムとして、
「くりはらツーリズム」を推進します。

平成22年1月28日

くりはらツーリズムネットワーク
設立発起人の会 会長 小野寺 敬

議長選出

議長 小野寺 敬 氏 (若柳地区グリーン・ツーリズム研究会)

議事録署名人の指名並びに書記の指名

議事録署名人 佐々木 弘 氏 (志波姫物産振興協議会)

議事録署名人 菅原茉衣子 氏 (くりこま高原自然学校)

書記 三塚 望幸 氏 (事務局 (栗原市産業経済部農林振興課農政係主事))

議 事

第1号議案 規約の制定について P27 に記載

第2号議案 役員の選任について

会長 (1名) 小野寺 敬 氏 (若柳地区グリーン・ツーリズム研究会)

副会長 (2名) 千葉 静子 氏 (農家民宿有賀の里たかまった)

馬渡 達也 氏 (多世代はうす文字倶楽部)

監事 (2名) 齋藤 政憲 氏 (栗原市有機の会)

曾根 憲男 氏 (グローバルベリーファームそね)

第3号議案 平成22年度事業計画 (案)

1 理 念 P7 に記載

2 重点目標

「栗原を知ろう」・「仲間を増やそう」

… 持続的な組織運営の創意工夫

活動内容や役割を模索しながら、組織を作り上げていく期間

3 事業計画

(1) 研修

会員相互の活動の視察 (年に数回、定例で懇談会を開催)

会員向け研修会の実施 (視察を含む)

(2) 広報

会員の活動をWebで紹介、行政・報道機関等に広報

会報誌の発行

(3) 交流

市内外の人々との交流事業

(4) その他

目的を達成するために必要な事業

第4号議案 平成22年度収支予算（案）

(1) 収入の部

単位：円

科 目		予算額	備 考
会 費	会 員（ 個 人 ）	25,000	@1,000 × 25
	会 員（ 団 体 等 ）	30,000	@3,000 × 10
	賛 助 会 員	10,000	@1,000 × 10
合 計		65,000	

(2) 支出の部

単位：円

科 目		予算額	備 考
事 業 費		10,000	
負 担 金		10,000	みやぎグリーンツーリズム 推進協議会
事 務 費		45,000	消耗品費、事務委託費等
合 計		65,000	

予算の科目間流用については、会長が専決処理できるものとする。

(収入の部) 65,000円 - (支出の部) 65,000円 = 0円

その他 なし

閉 会

くりはらツーリズムネットワーク
副会長 馬渡 達也



今、紹介にあずかりました馬渡でございます。「くりこま高原自然学校」の所属で、「多世代はうす文字倶楽部」というのをやっております。本日、風が強い中ご参集くださりましてありがとうございます。

都会からIターンで来ましていろんなことを考えながらやってまいりました。最近、「地元学」の地域おこしの講習会とかでよく言われることですが、こんな人間が一つのことを変えていくには必要だということで、「風土」というのがあります。「風」はよそから来た人とか情報であるとか、「土」は土着の人、地元の方たち。あとは何と言っても「火」の人、熱い心をもった人。そして、違った地元学でよく言われるのが「よそ者」「ばか者」「若者」。私は栗駒文字というところに住んでいますが、なかなか若い人が少なくて。何かを始めようとするときは、まずは集まって、意見をぶつけあい、より良い方向に導くことが必要です。

実は今、自然学校に東京の大学生がワークキャンプというのをやりに来ていまして、わざわざお金を払って田舎の暮らしを体験しに来てくれています。そういうのが流行っているんですね。

それだけではなくて、やはり地元の子も達が未来に明るい将来をみつけられるように、この「くりはらツーリズムネットワーク」が活発に活動していくことを願って、まずは集まって、まずはスタートしましょうということでやっていければ良いなと思っております。

今日は、本当にお忙しいなか集まっただきありがとうございます。今後ともよろしくお願いたします。

ティータイム

- 協力金 500円
- コーヒー、抹茶、和菓子の提供
「長屋門 cafe いわさき花門」 千葉 恵子さん
- パウンドケーキの提供
「ピザと器のお店 カントリーストア」 広田 久美さん
齋藤 三恵子さんの手作り
- 協力
「農場蕎麦 坊の蔵」代表 後藤 菊子さん、「白鷺窯」河田 勉成さん



3 設立総会議事録

くりはらツーリズムネットワーク 設立総会議事録

- 1 日 時 平成22年3月21日(日)午後1時30分～午後2時30分
2 場 所 栗原市市民活動支援センター多目的室
3 出席者数 63名(会員45名、来賓5名、傍聴5名、事務局8名)
4 議 事

- 第1号議案 規約の制定について
第2号議案 役員を選任について
第3号議案 平成22年度事業計画(案)について
第4号議案 平成22年度収支予算(案)について

5 議事の経過の概要及び議決の結果

司会者(事務局)の伊藤仁志が開会を宣した。続いて、来賓の挨拶、祝辞、来賓の紹介及び経過報告をしたあと、議長の選任について諮ったところ、満場一致をもって小野寺敬を選任した。また、議長が議事録署名人として、佐々木弘氏、菅原茉衣子氏、書記に三塚望幸の指名をしたところ満場異議なく承認された。

第1号議案 規約(案)を配布し、事務局伊藤仁志から説明をし、その承認を求めたところ、満場異議なく承認可決された。

第2号議案 議長の提案により、事務局に素案の提示を求め、事務局伊藤仁志から素案を提示し、審議の結果、会長に設立発起人の会会長の小野寺敬氏、副会長に設立発起人の会副会長の千葉静子氏、馬渡達也氏、監事に設立発起人の会の齋藤政憲氏、曾根憲男氏が選任された。

第3号議案 議長は、平成22年度の事業計画案を提案し、その承認を求めたところ満場異議なく可決された。

第4号議案 議長は、平成22年度の収支予算案を提案し、その承認を求めたところ満場異議なく可決された。

議長は以上をもってすべての議案審議が終了した旨を述べ、閉会を宣した。

以上、この議事録が正確であることを証します。

平成22年3月22日

議 長 小野寺 敬

議事録署名人 佐々木 弘

議事録署名人 菅原 茉衣子

4 記念講演

くりはら観光塾

どうぞ、 お構いなく あるがままの 田舎の魅力

グリーンツーリズム研究家、田舎ナビゲーター 石田 馨氏

皆さんこんにちは、呼んで頂いてありがとうございます。設立総会に私も出ていたのですが、すっかり肩が凝ってしまいました。今、休憩中に肩を揉んで下さった方がありがとうございました。凄くほぐれてリラックスすることができました。腰が痛いこともありまして、座りながらお話をさせていただきます。勘弁して下さい。



この立派な冊子を作ってくくださった中に、講演内容が出ています。そして、資料の1番、2番、3番を大体メインでお話しますが、その中に4番から9番等も加えつつ、堅苦しくなく話すつもりでありますので、おかしき時は笑って下さい。「笑う門には福来る」です。本当に、絶対に1日1回は笑ったほうが良いと思います。なので、私の顔がおかしきても笑って下さい。宜しくお願いいたします。

それでは、私がどういう人間かということをもまず説明しつつ、田舎との関わりを話していきたいと思います。

グリーンツーリズム研究家、田舎ナビゲーターとして活動するきっかけ

プロフィールにも書いてありますが、東

京は神田に生まれました。父も母も東京にいて、本当に田舎を知らないまま育ちました。しかし、両親は旅行が好きだったので、小さい時からあっちこちに連れて行ってもらいました。私自身も時刻表マニアになっていて、学生時代は全国のユースホテルなんかを周ったりして、とっても旅好きでした。

学校を出てから新聞社に入り、主に婦人誌を担当していましたが、子供も生まれて退社。フリーライターになって色々本を出していました。

その子供が14歳、中学3年の時に、秋田県の西木村（現在は仙北市西木町）界隈に体験学習ということで、修学旅行の代わりに行くことになったのです。それが、今から12年前です。期間は5泊6日。田沢湖町（現在は仙北市田沢湖）にある「たざわこ芸術村」に寝泊りをして、最初の2日間は和太鼓の練習。その後、3日目・4日目・5日目の3日間が農家さんに朝から夕方まで手伝いに通う。5、6人のグループで、農家に分散して伺いました。稲刈りのシーズンだったので稲刈りをさせて頂いたり、薪割りをさせて頂いたり、「西明寺栗」という日本一ジャンボな栗で有名な里なので、栗の出荷の頃にも重なったものですから、栗農家さんに行った子供は出荷の手伝いと、

3日間みっちり農家の仕事をさせてもらいました。



息子が帰ってきた後、各家庭に配られた体験学習のビデオを見せてもらいました。息子の学校は私立(東京都町田市・和光中学校)で、髪型も服装も自由にして良く、わが家の息子も茶髪だったのですが、息子だけでなく、ビデオの中で最後に皆が泣いているのです。そして、農家の父さん母さん達と一緒に「帰りたくない!」「別れたくない!」「父さん、母さん」などという肉声が全部入ったビデオを見せられて、「何で?泣いて帰って来るの?」「どうして?」と、それは凄く不思議だったのです。

私自身は、それまで西木村を見た事も聞いた事ありませんでした。その前の年に田沢湖に行ったりはしていて、田沢湖の近くということは分かっていたのですが、西明寺栗ももちろん知らないし、西木村も見た事も聞いた事もなかったのだけれど、何しろ生意気盛りの子供達が泣いている…。それが本当に私にとっては不思議だったので、「何か訪ねることはできないかい?」と思っていました。

和光中学校はこのような体験学習を20年間も継続していて、その年が、たまたま20年目の区切りの年だったのです。そして、「お世話になった地元の農家の父さん母さん達と、東京の父さん母さん達との交流を、「たざわこ芸術村」でやりますから皆さん行きませんか?」と中学校の方から問いか

けられたのです。

そういうわけで、私は「涙の訳を知りたい」と、「しかも秋田でしょ?温泉あるし、酒も美味しい」と思ったもので、「行く行く!」ということに。歴代のお母さん達にも声がけがあったので、数十人のお母さん達と、その年の晩秋、11月位に田沢湖の近くの西木村に行くことになりました。

たざわこ芸術村に受け入れの農家の皆さまも集まり、歓迎会をして下さって、その夜は飲めや歌えの大騒ぎ。グデングデンの二日酔いになった次の日に、息子がお世話になった農家を訪ねることになりました。そこが西木村でも第1号、秋田県でも第1号の農家民宿「泰山堂」だったのです。



泰山堂のお父さんお母さんに迎えられて、超二日酔いでご飯なんか絶対食べられないと思っていきましたが、新米の「あきたこまち」その目の前の父さん母さん達が「おらが作ったからうめえはずだから、二日酔いなんて吹っ飛ばすべ」と、口をつけてみたら本当に美味かったのです。農家さんの直接のご飯なんて食べた事がなかったので、二日酔いの自分を忘れて食べました。それまで農家民宿なんて聞いた事も見た事もなかったのですが、新米だけではなくて、庭先にある「つるむらさき」や、採れたての「ほうれん草」などの野菜を食べさせてもらって、初めて農家民宿という宿泊スタイルを知りました。

これは泰山堂さんの前景です。ここが正

面です。これがバーベキューハウスです。これがお父さんの藤井直市さん、お母さんのけい子さんです。大工のお父さんがほとんど作ったもので、囲炉裏や檜風呂があります。

何しろ農村風景に触れるのが始めてだったので、のんびりとした自然に心を許していたら、泰山堂のお父さんとお母さんが、「石田さん、そんなにここを気に入ってくれたんなら、2月10日においでよ」と。



西木村では、毎年2月10日に紙風船上げという祭りがあります。「それに来たら絶対に損することは無いから、フワフワと冬の蛍のような景色を1回見てごらん、騙されたと思って来てごらん」と言われて、こんなに雪が積もる西木村に行ったのです。



その時に泊ったのが、もう1軒農家民宿「星雪館」でした。それから「星雪館」と「泰山堂」を交互に泊まるようになりました。2つとも1日1組限定の宿で、当時の秋田は特に規制も厳しかったので、みんな自分達の住む家とは別な所に建物を建てていたのですが、こちらが星雪館で、2階が全部宿泊するスペースです。

西木村の紙風船上げに行ったら、今度は、

「石田さん、そんなにまた喜んでくれたなら4月に来ると良いよ」と言われたのです。



「今度は何があるんだい？父さん母さん」と聞いたら、「4月には東京ドーム4.2個分、約20haにカタクリの花が咲くんだ」と言われました。カタクリの花は私だってあちこちに行って見た事があったので「こんなものは東京の近所の埼玉県にだってあるよ」と言ったのですが、「そんなもんじゃない、騙されたと思って見てけれ」と言われて、すぐ騙されるタイプなので、見に行ったのです。そうしたら、このカタクリの咲いているところの見事さ。この木は、実は西明寺栗の木なのですが、木の地面のところのアリンコが種をコツコツと運んだという、見事なカタクリの段々畑と言えば良いのか、紫のジュウタンと言えば良いのか、その広がる景色にまた惹かれたのです。



さらに、「また今度も良かった、良かった」と言うと、「今度は6月に来てみる」とまた言われたのです。「何で？」と聞くと「山菜だよ」と言われました。山菜はワラビやゼ

ンマイくらいは食べた事があり、タラの芽、コゴミも知っていましたが、ボンナヤシドケ、アザミ、カタクリ、ウルイなど...山菜づくし！だったのです。それにまた感激しました。

よっぽど私は暇だなと思われるかもしれないのですが、それから何となく面白くなり、1日1組限定の宿に泊まれるということも気がラクで、友達を誘って行くようになりまして。すると、皆がはまってきて、どんどん仲間が増えていきました。行く度にお父さん、お母さんが小出しにするものだから、「また8月においでよ」と言われて、「トマトがいっぱい食べられるし、天然の鮎が山のように食べるよ」と。トマト好きだったので、また食べ物につられて、それでまた8月にも行く事になりました。そうこうしているうちに、また西明寺栗の季節になって、そんなことで、1年に4回も5回も西木村に行く事になり...、当時は“西木病”と言われていました。



そして、「子供の涙の訳」というのは、多分、その「お父さんお母さん達の笑顔」とか、都会から行くと何か「ホッとする空間」なんだろうなと思いつつ、私の方が物書きの端くれでくたびれていたものですから、はまってしまいました。子供の方はその後はケロツとしていたのですが、母の方がみるみるうちに、グリーン・ツーリズムというか、農家民宿というか、田舎への憧れがどんどん強まっていきました。

そうこうしているうちに、私自身が2003年に『日本のふるさと 星雪館物語』という本を出版しました。これを出版する経緯は、実は、西木村が町村合併で、村がなくなってしまう、西木という町名は残ることになるのですが、そのことへの思いと、自分自身で一冊の本にお母さん達の思いを綴った本を出したいという思いからです。

本で紹介していますが、星雪館のお母さん門脇昭子さんが、何故農家民宿を始めようと思ったかというきっかけを話させてもらいます。

星雪館の門脇さんは、普通の農家をされていたのですが、昭子さんが「このまま年をとるだけじゃ嫌だ！趣味も何もない生き方は御免だ、ハウスだけでは物足りなくなった」ということで、農家民宿を始めました。また、西木から出て行った人と話していたら、「たまには帰りたいけど泊まる場所もないし、親戚のところでは気兼ねもするし...」と言って、「そうだ！故郷を後にした人達の受け入れの宿にもなってあげよう」という思いで作ったという話でした。ですから、そんなに気負ったわけではありませんでした。



そうやって西木村を訪れるようになり、今度はどうしようかと考えた時に、私自身が物書きということもあったので、雑誌社からの依頼で、「第2のふるさとを訪ねる旅」ということで、グリーン・ツーリズムの記事を書くことになりました。それが『日経マスタース』という現在は休刊中の雑誌

です。その時に「グリーンツーリズム研究家」という肩書きを使いました。

第1回目から7回目まで、全国のあちこちを旅して、あちこちの実践地を段々と巡るようになりました。その中で感じたことが、あまりにも実践地のお父さんお母さん達の思いや田舎の楽しさ、グリーン・ツーリズムの楽しさというのが、東京の人達には全然伝わっていないということ。1992年くらいからグリーン・ツーリズムはあったのですが、なかなか東京では伝わっていない、その後もずっと「グリーン・ツーリズムって何だろう?」「農家民宿って何だろう?」と言われました。早く東京の人達に、面白さ、楽しさを知らせたい、どんどん繋ぎたい!架け橋になりたい!という思いがあって、全国各地の農家民宿や漁家民宿を訪ね歩くようになり、東京からその手の情報を発信して皆さんに紹介したいという思いが段々強くなったのです。

都会にいと息苦しいということもあります。ある農家のお父さんが、都会から来た女の子に「都会というカゴの鳥だもんね。あんた達、カゴから解き放たれたいんでしょ」と言ったという話を聞いた時、的を射ていると感心したこともあります。田舎には、「何も無いということは何でもあるということ」なわけですね。おいしい空気、おいしい水もあるし、安心・安全な食べ物、そういうものに凄く都会人は飢えている。しかも、今子供達を対象にしたプロジェクトも進んでいますが、子供達だけではなく、私の周りの大人たちも東京しか知らない人がたくさんいます。私の友達には、「小学校の時に友達が、お祖父さんお祖母さんの故郷が山形にある、秋田にあると言って帰るのだけれど、私は1回もそういう所に行った事が無い。私もそういう故郷が欲しい」という人が何人もいます。「それじゃ私と一緒にあちこち行ってみない?私が田舎

のナビゲーターになっちゃうわ」というようなことで、今度は「田舎ナビゲーター」という肩書きも添えることにしました。



各地を訪れた時の楽しみ方、

地域の人との関わり方

グリーン・ツーリズムと言っても、都会人はよく分からないのです。要するに、田舎に身をおいて楽しめば良いのですが、「体験体験って、体験しなければいけないの?」と色々なところで言われてしまいます。そうではなくて、農村に身をおくことだけで良い、そこで何もしなくて良いということ。これは資料の2番目・3番目の内容に繋がりますが、そこで「自分の好きなように過ごせば良い」それがグリーン・ツーリズム。「田舎を楽しむ術」「田舎と遊ぶ術」ではないかと思い、私はあちこちに行くようになり、友達の行きたい所を探して連れて行くようになりました。

例えば、鹿児島出身の友達は、「鹿児島ではリンゴの木を見た事が無い、リンゴの花を見てみたい」と。リンゴの花を摘花するという作業があるのですが、そういうこともしてみたいというので、長野県の松川町のリンゴ農家にリンゴの花摘みに連れて行ってあげました。すると、鹿児島の友達はいたく興奮していて、リンゴの花がいっぱいあって、可憐なリンゴの花を見ただけで、幸せそうでした。

日本というのは、何でも情報はあるので

すが、やはり、北から南まで全然違います。ある人には、何でもかんでも新鮮に映る、またある人からは、スタジオジブリの映画の『おもひでぽろぽろ』の世界に浸ってみたい相談を受けました。そして、私自身が『おもひでぽろぽろ』って何？と思っていた(映画を見ていなかったのです)のですが、「紅花摘みを思いっきりしてみたい」と。それを調べたら山形県の白鷹という町で紅花摘みをやっていて、ではそこに行ってみようということで連れて行きました。そんな形で、東京からどんどん人を田舎に連れて行くようになったのです。

しかし、たくさんの人に田舎へ Go!と思っても、農家民宿とか農村民泊と言うと、「えっ、民宿のご飯なの?」、「だって交通費かかるじゃん」、「秋田まで行ったら2万8千円位・・・」とか「それなら韓国に行った方が安いよ」などと言われてしまったりすることも多く、その良さが私の言葉やペーパーではなかなか伝わらない。何かアイデアはないかと考えていたら、思いついたのです。東京に地方のお母さん達を連れて来て、郷土料理を振舞ってもらい、交流会を開いたらいいのではないかと、お母さん達と都会人と「お見合い」をさせてみよう。お母さん達を連れて来て話をしてはどうか、そこで作った料理を東京で食べてもらったらどうか、そうすれば「お母さん達の魅力」、「方言の魅力」を知ってもらえるのでは...ということで、2年続けて、東京で「ぐりつり(GT)交流会」というのを開いたのです。

参加者を募ったら、1日25人、2日で50人位の皆さんが足を運んでくれました。2回目は栗原の「たかまった」の女将をお呼びしました。農産物や若柳地織、山谷さんの蓮クラフトのペンダントを販売して、栗原の色々な魅力も伝え...という会で、とても好評でした。



去年は、江東区の文化センターの依頼を受け、退職した中高年を対象にした「グリーン・ツーリズム入門講座」を3回開催しました。

私としては、「ともかく行きつけの農家をつくろう」行きつけの農家を作るとこんなに良い事があるよ」ということを伝えたかった。私自身最初に「泰山堂」さんを知るまで、直接お米を農家さんから買えるなんて知らなかったのですから。



行きつけの農家さんを作ると「父さん、母さん」と呼べるような関係になり、本当の親戚のように「開けっ広げの笑顔で迎えてくれる母さんや父さんの所に癒されに行けるよ」と。そして、「電話一本で取れ立ての米や野菜、色んなものを送ってもらい、中味の濃い付き合いができる、こんなに楽しいことはない、田舎の楽しさを知らないで死ぬのは惜しいよ」と話しました。

講座には、本当に様々な人達が来てくれて、紹介した「たかまった」さんや「星雪館」に予約してくれたりとか、遊びに行ってくれたり、自分でも自信が持てました。



そして、これからも田舎ナビゲーターとして、東京からいかに田舎に人を運ぼうかを考えていて、今年は本を書いたり、田舎と都会を繋ぐ行動をしていこうと思っています。

本当に田舎の空気感が好きなのですが、東京にいと凄く疲れるのです。ビルとか空気も。そして、田舎に行くと「まる～い感じ」がするのです。体格じゃないですよ。凄く「やわらか～い」のにホッとして、こんなに良いことはないなと思っています。でも、グリーン・ツーリズムの現場の取り組みが東京に伝わっていないということが、1番何とかしなければいけないことだと思っています。

「農村・漁村民宿のお母さん100選」というのもあって、「たかまった」の女将も選ばれているのですが、東京ではそういうものがあることすら、話題にもならないし知らない人が多いのです。本来は公的機関がきちんと情報提供をすれば良いのだと思うのですが、なかなか進まない。なので、微力ながらも私にそのお手伝いができたらと思っています。

地方にとってのグリーン・ツーリズムを行う魅力や価値

「きりたんぼ」は秋田の名物で、秋田に行くときりたんぼ鍋などを食べさせてもらいます。でも、実は、地元の方は、年中きりたんぼを食べているわけではないので、

人が来ることによって、今までの郷土料理の再発見ができます。そして、皆に「美味しい、美味しい」と言って食べてもらえるということが、とても幸せであると言えます。



密度の濃い交流ができ、直接消費者に物も売ることができたり、何よりも、グリーン・ツーリズムを実践されているお母さん達をみると、アンチエイジング効果が抜群だと思います。皆さん若返っています。何故なのか分からないのですが、5年前・10年前に会ったお母さん達は、皆もっとキラキラ輝いています。これは、やはり色々な人と出会える、そして、色々な人にほめてもらえる効果ではないかと。

例えば、先程の山菜なのですが、「こんな葉っぱでも喜んでくれるの?」というくらいに、都会の人はちょっとしたことで感心してくれる。そういうことで、ほめ殺しをされていると言うのですが、ほめられて悪い気はしません。それだけ東京の人達は、ある意味貧しいのかもしれないけれど。それから、「生産者と消費者の間がすごくかけ離れている」とある酪農家のお母さんから聞きました。例えば、乳牛と酪農の違いとがわからない、牛ならなんでも牛乳が出る、子供を産んでいる牛でなければおっぱいが出ないということも知らないで訪れる人もいます。生産者と消費者の間を繋ぐということも、グリーン・ツーリズムの現場

を知ってくれるということで役立つのではないかと考えています。



これは西木の物産館なのですが、いっぱい作り過ぎてしまった野菜をどうしようと思った時に、物産館があると販売することができます。規格外でも消費者にとっては美味しければ良いということが分かってきて、Sだろうが、Mだろうが、Lだろうが、自信を持って作れば皆が買ってくれる、また、農協さんから規格外で出荷できないと言われた野菜なども、今では産直とか、直接消費者に渡る事によって、「美味しければサイズとか見てくれは関係無い」、「その人が作る野菜や果物が美味しい」ということが伝われば、良いのだということが分かり、意識改革になったと話された方もいます。

そして、グリーン・ツーリズムの実践者が言われていることで一番よく耳にするのは、「自分が住んでいる地域の良さを改めて見直す事ができる」ということ。例えば、西木もそうなのですが、木の芽時の春、もみじの季節なんかに行きますと、「こんなに自然に囲まれたいい場所だったんだな」と分かります。それが、改めて自分の住んでいる地域を愛することができる、そういう再認識にもなるというふうにもおっしゃっています。

さらに、行く側と受け入れる側とも一緒なのですが、「非日常が楽しめる」ということだと思います。都会の人が田舎に行くのは、日常からかけ離れた別世界に行けると

いうことで、凄くリラックスできる。人間関係に疲れがちな都会人には、知らない人ばかりというのは、肩の力を抜くことが出来る。地元の人達もよそ者が来ることによって異種交流ができる、そのへんの新鮮さがあるのではないかとと思います。

これは東京の丸正というスーパー。目黒大橋店と若松町店、三鷹駅前店に数年前から「むらっこ物産館」のコーナーがあります。西木の直売所「むらっ



こ物産館」から直接、野菜やがっこ(漬け物)を仕入れ販売しています。そして年に1回、星雪館の昭子さん達が行って、手作りのお焼き(焼き餅)を食べてもらうというようなことを、東京のスーパーさんが気に入ってやってくれています。そういうことでの消費の拡大にも繋がっているようです。

旅館の様なサービスは求めないし、古い建物で十分だが、清潔感が必要



長野県のかなり南に大鹿村という所があるのですが、「日本で最も美しい村」連合参加の村のひとつです。ここの「山村体験館 たかやす」の女将伊東和美さんが、日本で最初にグリーン・ツーリズムの宿を開いた方だと言われております。

彼女は 1992 年に自宅の物置を改造して「たかやす」をスタート。もちろん彼女もグリーン・ツーリズムという言葉聞いた

ことは無かったのですが、元々は村の職員で、村制施行百周年記念事業として始まった「お母さんの山村留学」の担当者だったので。都会から色んな人が来て話を聞いていると、「なるほどな、そんな考えもあるんだ!」と、とても勉強になって、自分流に都市との交流を続けたいという思いで、前述のように平成4年(1992年)に「山村体験館たかやす」を開業されました。自宅の物置を改造した建物なので、外観はとても古びた感じです。しかし、中はとても清潔感に溢れていました。しかも囲炉裏もあり、都会人が癒される空間です。



「たかやす」の女将は、70歳を過ぎていますが、とても元気な方です。彼女が第1号だということで「たかやす詣で」をされるお母さん達が沢山いて、農家民宿を開業する前に訪れる。そして、ありのままの自然な姿を見て、「自分でもできるんだ」と思って帰られる方が多いらしいのです。

そんなわけで、古い建物でOKですが、清潔感は必須。この屋外のバーベキュー小屋で夏場は食事を摂ります。気持ちがいいことこの上ない。また、体験館の下にきれいな川が流れていて水遊びもでき、夏場は50人・60人の子供達も含めて、自由に遊べる「放し飼い状態」にできるスペース十分の敷地です。

創作料理やお仕着せの体験は不要。普段着でかつ美味しい地元の食を少量

「たかやす」では、何も決まった体験が

あるわけではなくて、自分達で考えて好きな事をさせて、成っているものは取れば良いというスタイル。

大鹿村は、V字型の地形。栗原のような田園風景ではなくて、山に囲まれた凄い傾斜の所なのです。ですから、伊東さんの畑も、坂の急斜面にジ



ャガイモが植わっていて、本当はこの時も何もする気は無かったのですが、「イモができてから掘っていけ」と言われて、アandesだの、男爵だの、5種類はあったでしょう。あるものは何でも掘って行って良いよと言われて、都会の友達ともどもたくさん掘りました。



しかし、田舎に行って「何をしろ」と言われるのは結構嫌なのですね。そこに行く事だけでももう満足なところがあるので、あとは「ポーっと空の雲を眺めていたい」とか、「川を見ていたい」とか、「蛍だけ見れば良い」とか、思い思いの過ごし方をしたい。だから、待ってましたとばかりに、「行けばこの作業が待っている」、「この体験をきなさい」と言われると、ちょっと引いてしまうところがあります。それは、こちらがやりたいと思うように仕向けるとか、自分達が「こういうことをしたい」という

ことに任せた方が良くと思います。「グリーン・ツーリズム＝体験」というイメージはしない方が良くというのが私の考えです。



最近、「田舎と遊ぶ」と言うことにしているのですが、「遊ぶ」というと「遊び人」とか悪いイメージなのですが、そうではなくて「遊ぶ」というのは、そもそもが「我に添う」からきているのです。意にかなうことをすることが遊びなのです。意にかなわないことはしたくない、だから「遊び心」と言うのだと思います。

ですから、「田舎と遊ぶ」、「土と遊ぶ」、「田んぼと遊ぶ」、「川と遊ぶ」、その遊び心を仕向けさせてくれさえすれば良くて、その一つが、先程の紅花摘みであり…。



あちこちに行くと、「体験、体験」とせつつかれることがあります。しかし、実は私達は「体験」というより田舎に行って何か役に立ちたいと考えている部分があるのです。お母さん達が凄く大変そうだから、何か田んぼの手伝いもしたいし、雑草取りもしたいと思うし、山菜採りのお手伝いなども一緒にやってみたいと思うのです。足手まといにはなるかもしれませんが、何かお役に立ちたい、そういうことで父さん母さんともっと繋がってみたいと思うのです。

それを体験というふうに区切られ、1時間3千円とか4千円と言われてしまうと、ちょっと何だかよく分からなくなってしまふというところがあるわけですね。

目からウロコというのは、先程言った山形県白鷹の「紅花摘み」です。紅花を摘んだことがある人はいますか？紅花は、凄いトゲがある植物で痛いのです。ですから、完全防備が必要です。防御しないとトゲが刺さって痛くてたまらないのです。早朝と共に摘むと、まだそんなに痛くないのですが、日が昇るにつれトゲが立ってくるので、作業は早朝から午前中がいい。

咲いている間というのは短くて、夏場の1週間位です。かなりの重労働、しかも限られた期間に摘み取らねばならないと「花摘み猫の手隊」が考えられ、「摘んでくれたら報酬がでます」というもの。確かキロあたり1500円。そして「いくらでも摘んでも良いから」と言われ、せっせと摘みました。みんな寡黙に一生懸命に。去年、一昨年と2年続けて行ったのですが、お昼代や宿泊代の足しになって、花と遊べ、それで喜ばれ「また来てください」と、とってもとっても皆がニコニコ幸せになって帰りました。

昨年行ったときには、白鷹が紬の産地であることを知り、白鷹紬の工房にも連れて行ってもらいました。機織り機を見て、作品を見ることによって、同行の友人達は、着物は買えないけれど、白鷹紬の名刺入れなどを買いました。楽しく交流し、楽しくお金を遣う。

グリーン・ツーリズムで「儲けよう儲けよう」と思わないで、まずは「損して得とれ」ではないけれども、とにかく人に来てもらって、そこから何かが始まる、交流の深さ・密度で世界が広がる。お母さん達はアンチエイジングで肌はツヤツヤになるし、お父さんだっって若い女の子が来るわけです。

から。

こういうことの繰り返しをしているうちに、地元の農産物も売れるし、村や町の認知度も上がって来ます。



私も「グリーン・ツーリズムの関係者」だからでなく、「東京の石田さんが来るから待っているよ」と言われると素直に嬉しい。来月もはじめて熊本の産山村という所に行く事になっているのですが、そうやってどんどん「行きつけの農家・漁家」を増やしていくうちに、何かあったときの逃げ場所確保になりえるのではと考えることもあります。例えば極端な話しですが、万一東京で大地震があった時に「疎開先」に困らないのではないかと。

そして、グリーン・ツーリズムの一番の醍醐味というのは、農・漁家に泊まれるということ。栗原の場合、今は「たかまった」さんしかありませんが、泊るということは、それだけ共有する時間が長いので色々なことが話せるし、交流も深まります。そこに泊まって、また農家レストランに行ったり、産直に行って大量に買い込みをしたり、様々に広がるのです。

農家民宿2号さん・3号さん・4号さんと、2号さんができたら、きっと3号さん・4号さんは簡単かもしれませんね。2号と言われるのが1番嫌かもしれませんが、3組位が2号になってしまえば怖くない。さて、「たかまった」さんを知ったのは、まちむら機構（財団法人都市農山漁村交流活性化機構）にいらした平井さんの紹介で、

たまたま「星雪館」の娘さんの富士美ちゃんに行ったのですが、あんな蔵座敷に泊まれるというのはグリーン・ツーリズムのならではだなあ～と感激しました。料理を盛る器の素晴らしさにも惚れて、東京の友達も度々訪れています。

でも、「たかまった」さんの様な所も良いけど、先程見た様な、「たかやす」のお母さんの所の様なやり方でも良いわけです。今はどんどん規制緩和されていますので、自宅の空き部屋で人を泊めるという方法で民宿を開業しているケースは沢山あります。栗原にも農家民宿が増えれば有難いのです。「たかまった」さんが、「満室」でも他にあれば、栗原にとにかく行こうになるはずなので。

安い、グルメ、食べ放題などを求めるなら、既存のツアーで十分

今まで、色々話しをして参りましたが、資料の5番から9番は書いてあることでおわかりになると思います。カニの食べ放題1泊2日とか、そんなものだったら既存のツアーに任せればいい。

「深い触れ合いを求めたい」という東京の人は多い。都会ではとてもそんなことが希薄になっています。歩いている人に声をかけたら「変なおばさん」と言われたり、小学生が何かやっても声もかけられません。しかし、田舎に行くと、「行ってきます」「こんにちは」と子供達も話してくれるし、田んぼで農作業しているおばちゃんに「何やってんですか～？」と気軽に話しかけられる。そして、「良いあんばいだね～」とか、秋田では「がっこでもくわねえがい？」と言われて知らない家でお茶を飲んだり…。こういうことはツアーでは絶対に味わえない事だと思います。

農家民宿や田舎暮らしは望まないという人はいるでしょう。ホテルに泊まりグル

メ三昧でツアコン付きがいい・・・それをよしとする人たちにムリに勧めることはしません。そうではない人達、田舎や農家、グリーン・ツーリズムに興味のある人も大勢います。リピーターや口コミで確実に繋がっていきます。

さらに、今は若い人達の農業に対する理解がどんどん深まってきて、グリーン・ツーリズムをきっかけに、田舎にIターンをしたいという声も聞きます。それは多分、就職難ということも関係しているかもしれませんが。一気にIターンをするのではなく、春夏秋冬が訪れてみる。若い人でも中年でも年寄りでも、ともかくは「行きつけの農家をつくって親しくなること」がグリーン・ツーリズム、はたまた、田舎暮らしへの第一歩ではないでしょうか。

有名な観光地があるからではなく、ふるさとに帰った落ち着き、安心感を求めるから田舎に行く



故郷に帰ったイメージが「兎追いしかの山 小鮎釣りしかの川」なのです。これが究極の日本のふるさとのイメージで、そんな場所に行くと、日本人に脈々と流れるふるさと回帰の精神を感じることができ、そこに身を置くだけで満足できる日々が送れると思います。

そして、昔から私が思っていたのは、イソップの『都会のネズミと田舎のネズミ』

という童話があるのですが、正に今もそうだなと思います。

都会のネズミが田舎のネズミを訪ねて「田舎はつまらない、都会には美味しいチーズやケーキがあるから遊びにおいで」と誘いました。しかし、田舎のネズミが都会のネズミの家に遊ぶに行くと、確かに美味しい物は沢山ありましたが、そこでは怖い猫や犬が部屋に入ってきて、田舎のネズミは怖がりながら田舎の家に帰りました。都会には美味しい物が沢山あるけれども危険も多かったという話です。これは現代にも当てはまるのではないだろうかと思います。都会は今、食も環境も安心・安全ではない状況なので、田舎は不便かもしれないけれども、生産者の顔が見える食材や豊かな自然が残っている。今も変わらない状況です。皆さんには、本当に自信を持って、美味しいものを作って笑顔で迎えて頂きたいと思っています。

各地の様子を紹介するのが私の役目もあるので、ご紹介します。

これは島根県浜田市の弥栄です。90年前の萱葺きの屋根で、瓦とサドイッチになっていますね。お父さんのお実家で、お父さんお母さん達は元々農家さんではないのですが、お父さんの家がこの様に残っていたので、ここで1日1組の農泊「茅葺の縁」をしています。



中はこんな具合で、なかなか立派で格好良く、そして、目の前は田園風景が広がります。まるでおとぎ話の様なこんな世界に

やっぱり都会の人は憧れをもつのではないのでしょうか。私が行った時には、丁度フクロウが迎えてくれて、ホーホーという声が聞こえてきて、それ以外は何も聞こえませんでした。こういった古民家を利用もひとつの方法です。



そして、ここも私が年に何度も何度も訪れている、大分県の宇佐市安心院(あじむ)町です。これは安心院の朝霧です。ここはグリーン・ツーリズムのメッカ、普通の家の空いた部屋に泊まれる民泊の元祖です。休刊中の『駱駝』という本の「日本一美しい村に長逗留」という企画で、栗原を取り上げて、私が原稿を書きました。カメラマンは別の方です。これは地震の前の年だったので、この温泉(湯ノ倉温泉湯栄館)も今は行けない温泉です。そこも紹介させて頂きましたし、「農場蕎麦坊の蔵」さんにもお世話になりました。

同じ様に安心院も取り上げたのですが、繰り返しになりますが、安心院では普通の家が民宿になっています。

これは何を持っているか分かりますか？ 鱧です。鱧は小骨がいっぱいあるのですが、ここ「桃源郷こびら」のお母さんは鱧骨切りの名人です。



このお父さんお母さん達の笑顔は全然

営業的ではないですよ。 「見て石田さん、これ何だか分かる？」という様な笑顔。この様な、全国のお母さん達の笑顔が、やっぱり何と言っても魅力なのだと思います。田舎に行く魅力。東京ではこんな笑顔の人が迎え入れてはくれません。

先程、体験、体験とせかされるのは嫌だと言ったのですが、例えば、こういう体験はしたくなるのです。これは何をしているかということ、鏝絵(こてえ)を作っているのです。安心院は伊豆長八という人が広めたと言われている鏝絵が70カ程残り、通称「鏝絵通り」もあります。



左のうつむいているお嬢さんが、毎年1回開かれている、静岡県松崎町の伊豆の長八美術館で行われた「全国漆喰鏝絵コンクール」でグランプリを取った方です。そして、先程のニコツとしたお母さんのお嬢さん。「桃源郷こびら」に行くと鏝絵体験ができるというわけでは、それは安心院に行くことができることです。そう、そこでしかできないことがあったら、先程の紅花もそうなのですが、私の様に田舎でオイシイお酒とぽっかり浮かぶ白い雲があれば良いという人間でもやりたくなるのです。

これは大分県の宇佐地方で、同じく安心院なのですが、蟹汁(がんじる)という郷土料理があります。そういうものもめったに普段は食べなくなりましたが、私を含め都会の人が行った時に振る舞ってくれました。農泊の「岩清水むら」のお父さんに頼

んだら、石臼も作ってくれました。それでモズク蟹をたたいて、ねぎを入れて・・・野趣あふれた郷土料理。もちろん美味しかったです。



地元の人にとっては郷土料理の再発見で、都会の人にとっては、やっぱり地元のもので食べたい、山なのに刺身を食べたいわけではない、少しくらいからそこでしか食べられないものが食べたいということになります。

「栗原では何なのだろうか？」と考えて、それを出すことによって、その郷土料理の再発見、味も発見できるのではないのでしょうか？そのような点もグリーン・ツーリズムをやっていて良かったことだと言われます。

先ほどの「岩清水むら」のお父さんは凄くて、鳥も絞めてくれました、若い女の子はキャーッ！と言っていました。今日も会場に高校生の女の子がみえています、現場でそういうのを見たらゾッとするかもしれないけれど、皆も「美味しい」と言って食べているのです。こういうことも食育であり、郷土料理の再発見であり...多様なのです。本当に都会人は私を含めて、田舎に行って、何を見ても、何を食べても喜びます。

昨日、職員の方達が連れて行ってきて「満てん」という所でご飯を食べたのですが、そこで私が「星がきれいだ～！」と言ったら、皆に「えーっ！」と言われました。

都内に比べれば鮮やかに星が見えたのです。東京の友達で生まれてから40数年間、流れ星を見たことがないという人がいて、去年弘前に一緒に行きました。そこで初めて流れ星を見た彼女は「石田さん、あっ！としか言えなかった。婚活成就とかお金持ちにと言えなかった」と、笑っていましたが、見ただけでも興奮していました。

私自身は、蛍の大群を見たいと思っています。蛍というのを初めていっぱい見たのが、かなり前、東京の椿山荘(文京区)という所です。お金を払って、1万円位だったかな。「蛍を鑑賞する夕べ」みたいな催しがあり、そこで飛び交う蛍を見たのです。1匹や2匹飛んでいるのはどこかで見たことがあったのですが、お金を払ってもいいから、写真で見るような「蛍の光」を見られたらいいと思っていたので。

でも、クリスマスツリーの電飾のような蛍ではありませんでした。こうやって田舎に色々に行くようになったら、各地で蛍に出会えています。「たかまった」さんの所の川の下でも去年蛍を見ることができました。しかし、電飾状態の蛍狩りは経験ありません。そこで、6月には、四国の愛媛県内子町に参るつもりです。先程の小出しではないけれど、毎年行っているのですが、「石田さんが言うクリスマスツリーのような蛍の光なんよ」と言われて、その言葉に釣られて予定を入れました。

「こんなもので喜ぶの？」ということで都会人は喜ぶのです。だから、グリーン・ツーリズムには、こうでなければならぬという決まりがありません。つまり、こんなもの・あんなもの・こんな所でも何でもできます。何でもあり、です。なんでもありというのは、漠然としていますが、とにかく自分のできること、やってみたいことをしてみれば、それなりの答えが出ると考えます。継続は力です。続けていくうちに、

「本当にやっていて良かったな」と思えるはずです。私達も東京からいっぱい人を呼ぶように致します。交流の輪が広がることを願ってやみません。

話しが前後したり、聞き苦しいところがあったかと思えます。もっと、各地の紹介もしたかったのですが、時間がもう押ししてしまいましたよね、すみません。

最後に、宮崎県の日向地方に「濡れ草鞋を脱ぐ」という言葉があります。私のブログにも書きましたが、私みたいなよそ者が、村にやってきてある家を頼ることを指します。そういう知らない所に行って、お世話になる所があるということはとても幸せだと、痛感しています。なので、しばらくは濡れ草鞋を脱ぐ生活を続けたいと思っていますのでそんな家が、栗原にも増えたらいいなと。今後とも宜しくお願いします。



石田 馨さんのプロフィール

本名：石田 恵子（いしだ けいこ）
グリーンツーリズム研究家、田舎ナビゲーター。
（有）梁塵社 代表取締役。ふるさと応援団くりはら輝かせ隊会員。1954年東京・神田生まれ。日本経済新聞社で主に雑誌編集に携わる。退社後フリーライターに。2001年企画・編集・出版を手がける（有）梁塵社を設立。

【取材・執筆】

『日経マスターズ』（日経BP社）
2006年1～7月号に連載
「第二の故郷を訪ねる旅グリーン・ツーリズム」
『駱駝』（小学館）2007年10-11月号
GT 実践地の大分・安心院、愛媛・内子、宮城・栗原の記事を寄稿

【講演】

2007年から2009年の間に秋田、愛媛、大分で「都会人の目を通しての田舎の魅力」について講演。
2009年6月から7月に「50代からのパワーアップ塾行きつけの農家を作ろう グリーンツーリズム入門講座」を東京都江東区文化センターで3回開催。

【自主企画】

GT交流会
3年前から開催会場との共催で企画。GT現場で活躍する全国のかあさん達を東京に招き、手作りの郷土料理を振る舞ってもらい、語り合い、田舎と都会との交流のきっかけにするもの。農閑期の冬場に行い、第1,2回とも定員50名を超える参加者を集め、好評を博した。3回目は2010年に開く予定。

【ブログ】

「馨のぐりつり よもやま話」
url <http://gurituri.jugem.jp/>

【著書】

『日本のふるさと 星雪館物語』（梁塵社）
『からだイキイキビタミンブック』
（共著・日本文芸社）
『素敵なエコノミカル旅行術』
（東京教育情報センター） など

5 規 約

くりはらツーリズムネットワーク規約

(名称)

第1条 本会は「くりはらツーリズムネットワーク」(以下「ネットワーク」という。)と称する。

(目的)

第2条 ネットワークは、栗原市内の実践者が互いの価値観や活動に共感しながら交流し、よりよい関係を築き、協働する「くりはらツーリズム」で地域の価値を普遍化し、市民が精神的・文化的・経済的に充足した暮らしを営んでいくことを目的とする。

(事業)

第3条 ネットワークは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) ツーリズムの啓発・普及に関すること
- (2) ツーリズムの研修、情報交換・収集に関すること
- (3) 人材育成に関すること
- (4) その他ネットワークの目的達成に必要なこと

(会員)

第4条 ネットワークは、本会の趣旨に賛同する個人及び団体等をもって組織する。

2 ネットワークの会員は、次のとおりとする。

- (1) 会員 ツーリズムを実践している、または、ツーリズムに関心及び興味のある栗原市民
- (2) 賛助会員 ネットワークの趣旨に賛同し活動を支援する者

(入会・脱会)

第5条 入会しようとする者は、会費を添えて入会申込書(様式第1号)を会長に提出するものとする。

2 脱会しようとする者は、脱会届(様式第2号)を会長に提出するものとする。

(会費)

第6条 会費は年会費とし、額は次のとおりとする。

- (1) 会員 (個人) 1,000円 (ただし、同一世帯の範囲とする。)
(団体) 3,000円
- (2) 賛助会員 一口 5,000円

2 納入期限は、毎年4月末日とする。

3 年度途中に入会する場合にあっても前項に定める額を納入するものとし、脱会届が提出された当該年の会費は納入しなければならない。

(役員)

第7条 この会に会長1名、副会長2名、幹事若干名、監事2名を置き、役員任期は2年とする。ただし、役員再任は妨げない。

2 会長、副会長、幹事及び監事は会員の中から総会で選出する。

3 会長はネットワークを代表し、会務を総括する。

4 副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時は会長の職務を代行する。

5 幹事はネットワークの運営をつかさどる。

6 監事はネットワークの会計を監査する。

(顧問)

第8条 ネットワークに顧問を置くことができる。顧問は、会長が役員会の承認を経て委嘱する。

2 顧問は、ネットワークの運営に関し、指導助言及び意見を述べることができる。

(総会)

第9条 総会は会長が招集し、会長が議長となる。

2 総会では、次の事項について審議する。

(1) 規約の制定及び改廃に関すること

(2) 役員を選出に関すること

(3) 事業の推進に関すること

(4) 予算及び決算に関すること

(5) その他ネットワークの運営に関すること

3 総会の議事は、出席した会員の過半数をもって決し、可否同数の時は、議長の決するところによる。ただし、賛助会員は議決権を持たないものとする。

(役員会)

第10条 役員会は、会長、副会長及び幹事で構成する。ただし、会長が必要と認める場合は、その他の者を参加させることができる。

2 役員会は会長が招集し、議長は会長が当たる。

3 役員会では、ネットワークの運営に関し必要な事項を協議する。

(部会等)

第11条 ネットワークに特定の事項を協議及び企画する部会等を置くことができる。

2 部会等の運営について必要な事項は、会長が別に定める。

(経費)

第12条 ネットワークの経費は、会費、補助金及びその他の収入をもって充てる。

(会計年度)

第13条 ネットワークの会計年度は、毎年4月1日から翌年の3月31日までとする。

(事務局)

第14条 ネットワークの事務を処理するため、事務局を栗原市産業経済部内に置く。

(その他)

第15条 この規約に定めるものの他、ネットワークの運営に必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

(施行期日)

1 この規約は、平成22年3月21日から施行する。

(経過措置)

2 初年度の会計年度は、第13条の規定によらず、設立の日(平成22年3月21日)に始まり、平成23年3月31日に終わるものとする。

(様式第1号)

くりはらツーリズムネットワーク入会申込書

くりはらツーリズムネットワーク会長 殿

次のとおり入会を申し込みます。

申 込 年 月 日	平成 年 月 日
会 員 種 別 で囲んでください	個人(1,000円) 団体(3,000円) 賛助(1口5,000円)
氏 名 (団体の場合は代表者)	フリガナ -----
商 号 又 は 名 称	
申 込 者 の 役 職	
所 在 地 又 は 住 所	〒
電 話 番 号	
F A X 番 号	
電 子 メ ー ル	
ホ ー ム ペ ー ジ	
会 員 数 (団 体 の 場 合)	

個人 ... 同一世帯の範囲であれば、複数でも個人の登録で可。市民に限る。

団体 ... 任意団体、法人の別なし。市民に限る。

個人事業者でも従業員を本会事業に参加させたい場合は団体会員。

賛助 ... 本会の主旨に賛同し、本会を応援してくれる方。市外の方も可。

(様式第2号)

くりはらツーリズムネットワーク脱会届

平成 年 月 日

くりはらツーリズムネットワーク会長 殿

所属

氏名

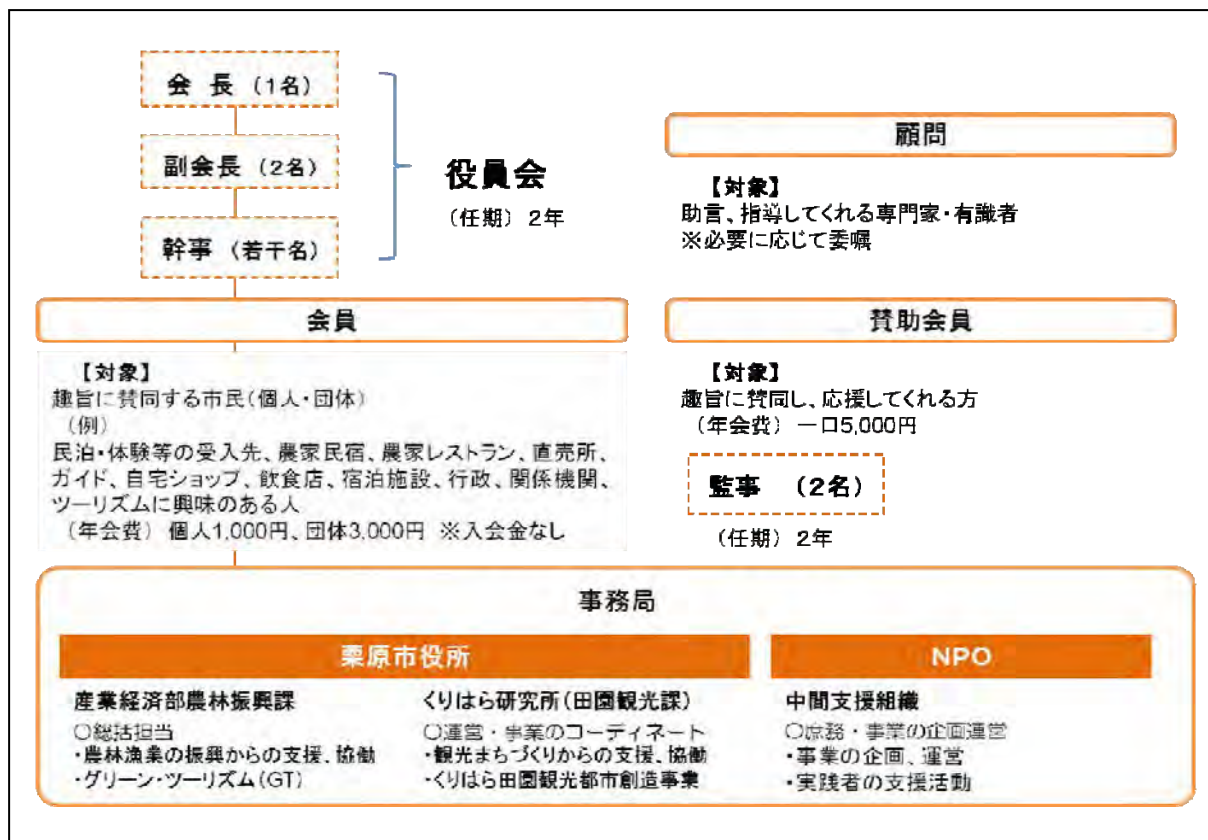
印

住所 〒 -

下記理由により脱会する旨を届け出ます。
記

脱退理由

6 組織イメージ図



7 設立発起人の会

- 会 長 小野寺 敬(若柳地区グリーン・ツーリズム研究会)
- 副会長 千葉 静子(農家民宿有賀の里たかまった)
- 馬渡 達也(くりこま高原自然学校、多世代はうす文字倶楽部)
- 会 員 後藤 菊子(農場蕎麦 坊の蔵)、鈴木 春江(お食事処 四季味)
- 曾根 憲男(グローバルベリーファームそね)、齋藤 政憲(栗原市有機の会)
- 千葉 和恵(栗原女性ネットワークくりネッ娘)、菅原 茉衣子(くりこま高原自然学校)
- 佐々木 弘(志波姫物産振興協議会)、千田 滋紀(金成農産加工施設利用組合)
- 事務局 栗原市産業経済部農林振興課(担当/伊藤 仁志、三塚 望幸)
- くりはら研究所(担当/大場 寿樹、高橋 幸代)

『くりはらツーリズムネットワーク設立総会記録集』

作成 / 平成22年3月

発行 / くりはらツーリズムネットワーク

編集 / 事務局

栗原市産業経済部農林振興課

〒987-2293 栗原市築館薬師一丁目7番1号(築館ふるさとセンター2階)
電話：0228-22-1135 ファクス：0228-22-0315

くりはら研究所(栗原市産業経済部田園観光課)

〒989-5612 栗原市志波姫新熊谷284番地3(くりこま高原駅内)
電話：0228-22-1151 ファクス：0228-23-5370

Email kurihara.tn@gmail.com

くりはらツーリズムネットワーク設立総会
記 録 集



くりはらツーリズムネットワーク